

Grounded Theory Approach

川原由佳里* 稲岡文昭*

はじめに

最近、わが国において注目されるようになった質的研究法のひとつに Grounded Theory Approach がある。周知のとおり、Grounded Theory は人間の行動を社会的相互作用の観点からとらえ、具体的領域の理論を生成する研究方法であり、1960年代、アメリカの社会学者 Glaser と Strauss により開発されたものである。現在、アメリカでは社会学の他、健康科学、行動科学、人間科学などにおいて Grounded Theory による研究が行われており、一方、わが国でもまだ数が少ないとはいえ、これを用いた研究が増加しているのが現状である。

もともと Grounded Theory は、Glaser と Strauss (1967) 属する当時の社会学者たちが百数年にわたってもち続けてきた一種の傾向、つまり実証的研究への偏重に対する批判から生まれてきたものであった。Glaser と Strauss はその様子を次のように述べている。研究者は、データに基づいていないところで高度に抽象化された理論枠組み (Grand Theory) に対して、小規模な方法で検証を繰り返すことに専念している。研究成果に関しても、期待したとおりであればよしと考え、さもなければ検証の方法をより厳密にしようと試みる。常に理論の検証が焦点であり、理論生成の立場や方法から疑問を投げかけるものは少なかった。このような硬直状態を打開するために開発された研究方法が

* 日本赤十字看護大学

Grounded Theory であった。

事実、Grounded Theory は上記の実証的研究とは異なり、理論生成の立場を一貫して強調している。Grounded Theory とは、読んで字のごとく、現実の状況の中で起こっている現象それ自体に基 (grounded) づいて行われる研究方法であり、それと同時にその研究によって得られた成果、つまり現象に密接に符合する理論を指す。すなわち、この研究方法は、複雑多様な社会的状況のもとで人々がとる行動を説明し、予測する理論を生成することを目的に、実際の状況から「質的」なデータを系統的に収集し、分析する帰納的研究法なのである。

現在、わが国の保健行動科学では、研究対象である人々の行動を数量的に扱い調査した研究が多く、質的に探究したものは少ない。また、健康や病気に際して人々がとる行動は複雑多様であり、数量的に扱える範囲にも限界があるだろう。したがってこの領域の研究に Grounded Theory Approach が用いられることで、新たに解明される現象も多いと考えられる。以下、この研究方法を用いた研究が増加している傾向とその可能性に期待して、Grounded Theory Approach について、研究で取りあげる現象、その現象を解明する方法、そして研究結果の3点から概観しようと思う。

I Grounded Theory が研究対象とする現象

まず、Grounded Theory Approach が研究対象として取り上げる現象について述べる前に、Grounded Theory がその流れをくむ H.Blumer (1969) の象徴的相互作用論 (symbolic interactionism) について述べる。Grounded Theory Approach が取り上げる現象も、この基本的前提によってある程度決まってくる。

象徴的相互作用論の基本的前提は、「人間はものごとが自分に対してもつ意味ののっとして、そのものごとに対して行為する」というものである。ここで言われていることは、人々の行為が生じてくる原因を、刺激に対する反応や無意識の動機にみるのではなく、といて文化的規定や社会的価値などにみるので

もない。人々の行為の原因を、その人の内部意図——つまりその個人が、自分のおかれた状況やものごとに対してもつ意味——から説明しようとするのである。さらに H.Blumer はその個人の内部意図に、社会変革の根元としての、予測不可能で非決定論的な部分を強調した。つまり、この基本的前提の特徴は、人間が機能的および社会的に規定されて行為する一面を認めながらも、それぞれの個人がものごとに対してもつ意味にのっとして行為するという個人の主体性を前面を押し出したこと、それを社会変革の原因として積極的に取り上げた点である。

こうした基本的前提のもと Grounded Theory Approach では、人間集団の相互作用のプロセスと、それらの人々の行動を導いたところの意味に関連した現象を取り上げ、研究することによって解明する。したがって Grounded Theory Approach の研究者は、研究全体を通じて、自分自身の目ではなく、行為を展開させたその行為者の目と経験を通して社会的世界を検討しなければならないが、この点は解釈学的方法と同じである。

II Grounded Theory が現象を解明する方法

では Grounded Theory Approach は、人間集団の相互作用のプロセスやそれらの人々の行動を導いたところの意味などに関連した現象を、どのような方法で解明していくのだろうか。

Grounded Theory Approach で中心となる分析方法は、「継続的な比較分析 (constant comparative analysis)」と呼ばれている (Glaser and Strauss 1967, Strauss and Corbin 1990)。継続的な比較分析においては、データ収集とデータ分析は交互に行われるが、ここでは便宜上これらを別々に分けて述べることにする。再び言うておくべき重要な点は、研究過程全体が常に現実 (リアリティ) に基づかなければならないこと、そして研究結果として現実に密接に符合した理論が求められることである。

まず、テーマを選ぶにあたっては、他の質的研究と同様、十分に研究がなさ

れていない領域、あるいは従来の研究方法では行き詰まりであり、この研究方法を用いることで新たな洞察が得られそうだと思うような領域を選ばなければならない。研究者は既存の文献を調べたり、自分自身の経験を振り返ることによって研究テーマを見分けていく。一般的に Grounded Theory Approach の研究テーマは、それが十分研究されていない領域であるという理由により、初めのうちは焦点が広いことが多い。

続いて研究者は、そのようなテーマを携えてデータ収集にとりかかる。先に、Grounded Theory Approach では、行為者の世界の内側に入り、その行為者の見ごとく彼の世界を眺めなければならないと述べたが、データ収集においてもこれがあてはまる。つまりそういった意味での grounded な、リアリティに基づいたデータを収集しなければならない。そのために必要なことは、研究者自身が既存の理論枠組みや偏見から自由になること、そして参加観察やインタビューの他、生活史・自伝・日記・手紙のような個人的資料など、あらゆる調査技術を駆使して、系統的に質的データを収集することである。

理論生成のための分析の手順には次の3つのコーディングがある。初めに行われるコーディングは、オープン・コーディング (open coding) である。ここで研究者はデータを1文節、あるいは1行ごとに区切って調べ、コード化する。さらに、コード化されたものどうしを比較する。「同じものはどれか、違うものはどれか」というようにである。これにより同じものどうしがまとめられ、命名される。このようにして実際のデータに基づいたカテゴリーとその属性 (property) が生成される。

次のアクシアル・コーディング (axial coding) では、研究者はオープン・コーディングで生成した概念をパラダイムの特性に沿って構成していく。パラダイムの特性とは、現象 (phenomenon)、原因条件 (causal condition)、文脈 (context)、介入条件 (intervening condition)、作用／相互作用 (action／interaction)、結果 (consequence) である。この段階でもあらゆる概念の間で比較が行われ、それを通じて概念と概念がその間の関係性によって結びつけられていく。

コーディングの最後の段階は選択的コーディング (selective coding) である。ここでは前の2つの段階を受けて、研究を通じて最も中心的な現象を選び、核となるカテゴリー (core category) を生成する。そしてその中心的な現象を取り巻く文脈が変化するプロセスと、それぞれの文脈における中心的な現象やパラダイムの特性の変化、バリエーションを明らかにする。こうして概念とその関係性のしっかりした理論の形式が整っていく。

前に述べたように、すべてのコーディングにおいて、データ収集とデータ分析が交互に繰り返し行われなければならない。これを行うのは、Grounded Theory が、現実と密接に符合した理論を生成することを目的としているからである。Grounded Theory では、データそのものから理論を生成すると同時に、研究過程の全体を通じて、統計的手法を用いなくても、生成されつつある理論がデータと密接に符合しているかを確かめる作業が課せられている。データから理論を生成し、それがデータに符合しているかを確かめる、この螺旋状のプロセスこそが grounded な理論、つまり現実に基づいた理論を生成するための必要条件なのである。具体的には、研究者は生成しつつある理論に基づいて次のサンプリングを決定し(理論的サンプリング)、そのサンプリングから収集されたデータや分析結果に基づいて、前段階で生成した理論を比較・検討する。理論はその比較・検討を通じて確証されたり、あるいはこれを否定するデータに出会って、修正および統合を受けながら発展していく。

やがて、理論の密度が高まってくるにつれ、データ収集やデータ分析の焦点はせばまってくる。分析を終了するのは、分析した結果に対して新しいデータが現れなくなる状態；すなわち理論的飽和 (theoretical saturation) に達した時点である。この時点で、研究者は理論を発表するための記述を行う。

III Grounded Theory の研究結果

今まで述べたように、Glaser と Strauss が想定していた理論とは、リアリティに限りなく近く、豊かで、概念とその関係性がはっきりした説明理論であっ

た。つまり、人間関係のプロセスや人々の行為を導いたところの意味といった多様で不断に変化していく現象に密接に符合し、現象に関連したあらゆる条件やバリエーションが組み込まれた理論、そしてその研究で取り上げた具体的領域、あるいはそれとよく似た具体的領域を十分説明し、実際にその領域の人々によって利用される理論である。(Glaser and Strauss 1967)

このように、Grounded Theory は、特定の具体的領域に限って現象を説明する理論であるために、一般的に理論と呼ばれる高度に抽象化された知的構造物とは様相が異なっている。Grounded Theory の叙事的な説明スタイルは、特別に高度で難解な概念もなければ、そのカバーしうる範囲も狭い。一見して理論と呼ぶには一般的な説明力が乏しいようにみえるだろう。特に、抽象的であるほど高尚な知識であると考える人々、数量化された客観的分析結果でなければすべて主観的で恣意的な解釈にすぎないという認識論に立つ人々、Grounded Theory が研究対象とした具体的領域に関心のない人々はこうした批判的態度をとりやすい。

だが、前者の一般的・抽象的理論が、複雑多様な実際状況での人々の行動を説明しようとする際、おおよその説明力しかもたないのに比べ、Grounded Theory は研究で取り上げた具体的領域やそれとよく似た領域、つまりその守備範囲とするところにおいて十分な説明力を発揮し、実際に利用できるものである。この守備範囲における理論の説明力、実用性こそが、Grounded Theory の本領であろう。もともと Grounded Theory はその認識的立場からして、研究で取り上げる多様な社会的日常的状況が、いつまでも 1 つの理論によって説明できるとは考えていない。Glaser と Strauss はこのことについて、あまりにもデータと密接につながっているために、修正や再構築は避けられないが、完全に論破されたり、他の理論に置き換えられることはない、と言う。Grounded Theory は普遍的な真理の解明を目指すものでもなく、唯一の理論たらんとするものでもない。いわば永遠に完成することのない、プロセスとしての理論なのである。

おわりに

基本的には、どのような研究でも、まず研究者が自分の解明したいと思う現象の本質を見きわめること、そしてその現象に適合した研究方法をデザインすることが重要である。今まで概観してきたとおり、Grounded Theory Approachは、人々の相互作用およびそれを導いたところの意味に関する現象に対して、一貫して現実のデータに基づきながら、十分な説明力と実用性を有する理論を生成しようとする方法論であった。

保健行動科学が研究にて解明しようとする対象は、身体的な健康・病気のみならず多様な心理社会的背景をもつ人間の行動であり、また、究極において研究で得られた知識は、人々の健康的な行動変容へと結びつかなければならない。その意味において Grounded Theory Approach は、保健行動領域における研究と実践の間の橋渡しの役目をするものとして、大きな可能性を秘めたものである。これらの課題が Grounded Theory Approach の導入によってどの程度まで実現されるかは、今後の研究の発展と展開にゆずることにして、本稿を締めくくろうと思う。

最後に、Grounded Theory の方法論については、1967年の“The Discovery of Grounded Theory”を皮切りに、Strauss らを中心として改良、開発が進んでいる。実際に研究にあたられる方は、まず Grounded Theory の基本的立場について書かれた1967年の著作に加え、それ以降の文献を参考になさればよろしいか、と思う。

主要文献

- 1) Glaser, B.G. and Strauss, A.L. : The Discovery of Grounded Theory, Strategies for Qualitative Research, Aldine Publishing Company, 1967.
- 2) Blumer, H., 後藤将之訳：シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法,

勁草書房, 1969.

3) Strauss,A.L. and Corbin,J. : Basic of Qualitative Research Grounded Theory Procedures and Techniques, SAGE publications, 1990.

4) Chenitz, W.C. and Swanson, J.M., 樋口康子, 稲岡文昭監訳 : グラウンデッド・セオリー—看護の質的研究のために, 医学書院, 1992.

5) Glaser,B.G. and Strauss,A.L., 木下康二訳 : 死のウェアアネス理論と看護, 医学書院, 1988.

6) 稲岡文昭, 樋口康子 : 看護研究におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach), 看護研究, 20(3) : 72-77, 1982.

7) 木下康仁 : Grounded Theory の理解のために, 看護研究, 23(3) : 250-237, 1990.
